

## ◆ブレイクの技法

ブレイクがヨブ記に用いた技法は、「ライン・エングレーヴィング」と呼ばれるものである。これは、まず最初に絵柄全体や、モチーフの配置、さらに登場人物の大まかな形態把握などをエッチングで行い、また、細部や背景といったあまり主張させる必要のない部分も、同様にエッチングで処理していく。その後輪郭線や強調すべき重要な部分をビュランで彫り加えるものである。

18世紀後半のイギリスの銅版画においては、「トーン・プロセス」と「ライン・プロセス」という二つの系統が存在し、色彩の明暗や陰影といった絵画が見せる階調の再現を目指して、メゾティントやアクアティントといった新技術を駆使する前者に対し、後者はビュランという彫刻刀による描線を主体とした、16世紀以来の伝統的な技法を守っていた。ブレイクは後者に属していた。

## ◆ヨブとは誰か

『旧約聖書』「ヨブ記」の主人公。「逆境でも人は信仰を捨てぬか」という命題についての神とサタンとの賭の対象として選ばれ、数奇な運命を辿る。サタンによって家財を略奪され、子どもを災害で亡くし、自らも全身の腫れ物に苦しむ。あまりの苦難にヨブの心にも神の不信が生じそうになり、それこそが傲慢であるとの友人の言を受けるが、全能者たる神の顕現を目の当たりにしたことで、その存在を確認し、再び幸福を得る。伝統的に「忍耐」と美德の擬人像として、また信仰の試練を示す近代的な画題としても取り上げられ、苦難に苦しむ姿で描かれることが多い。

ヤン・フーケの作例では、ヨブのみすぼらしい姿と友人達の豪華な衣装とが対照的で、彼の境遇の悲惨さを際立たせる。また、デューラーとラトゥールでは、ヨブが友に妻に全身の彼の腫れ物を見つかる場面が選ばれている。上から見下ろす姿勢で夫を叱責する妻を描くことによって、ヨブの寄る辺なさが一層強調されている。



ヤン・フーケ  
《ヨブと偽りの慰め人たち》  
1452-60年



アルブレヒト・デューラー  
《ヨブとその妻/二人の楽士たち》  
1504年頃



ジョルジュ・ド・ラトゥール  
《妻に辱められるヨブ》  
1630年代